広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ラマルティーヌのnarcissismeについて
Author(s)	西岡, 政治
Citation	フランス文学 , 6・7 : 46 - 55
Issue Date	1965-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040866
Right	
Relation	

ラマルティーヌの narcissisme について

西　岡　政　治

「さてナルシスは，愛慾によって変貌するこの幻を，岸辺にあって眺めている．彼は夢想する．ナルシスは，独り淋しく他愛なく，この脆弱な影を恋い慕う．彼は愛の渇きを河上に医そうと，愛を求めて身を躍める．身を躍めれば倏忽としてこの幻は消滅し，河上には，彼の唇を迎えてさし出した唇と，彼を眺める二つの眼，彼自身の眼を見るのみである．彼はこれが己れであることを――己れは孤独であることを――己れは我とわが面影を慕いつつあることを悟る．」①

ラマルティーヌは，彼の青春時代に幾度びとなく聞いた幾人かの女性の恋の囁きによって綴った回想を，50歳を過ぎた岸辺にあって眺め，晩年の孤独な彼の愛の渇きを医そうとする．そして想い出というプリズムを通して彼がよみがえらせることに喜びを感ずる女性たちの亡霊に取り囲まれた，彼自身すっかりうつとりと満足している自分の姿を静かな水の面にみつめる．この様にして書かれたのが，Henriette,② Raphaël,③ Graziella,④ Régina⑤ 等のエピソードであり，"Les Confidences"⑥ である．然し彼が愛を求めて水の面に身を躍める時，ナルシスの背景となっていた空であり，木々であり，景色であったそれらの女性の姿は，ナルシスの影像と共に他愛なくそして脆くも消滅してしまうように私には思える．そして彼の水の面に近づけた眼には，それらの女性の姿の代りに，三人の女性即ち彼の母，彼の妻そして彼の姪の姿が映ずるのである．逆説的に言えば，この三人の女性が彼の生涯の縦糸として常に存在していたからこそラマルティーヌのnarcissismeが形成されたのではないかと考える．従って，この3人の女性に対する彼の態度を検討することによって，彼の narcissisme は明確になるのではなかろうか．

先ず，彼の幼年時代の想い出の検討は，彼の残りの生涯に大きな光を投げ得ると思う．この幼年時代全体を，更に強いて言えば結婚する迄の青年時代全体を彼の母の影像が支配している．

"Les autres mères ne portent que neuf mois leur enfant dans le sien, je puis dire que la mienne m'a porté douze ans dans le sien." (Les Confidences)

と彼が述べているのをフロイト流にはエディプス・コンプレックスと説明され得るかも知れないが，彼の母の姿は "Les Confidences" の中では殆んど全ページにわたって全能の保護者の様に描かれている．このことは彼が彼の母の体内に隠れに帰る身振りを無意識的に示していることを表わす．事実この要求は彼の全生涯続いている．

"…Je la retrouve toute vivante quand j'ai besoin de me réfugier encore dans son sien." (Les Confidences)

この引用文中の彼は既に50歳を過ぎてい

る彼なのである．その彼は時代の屍衣の裡に包み隠された彼の青春時代をよみがえらせようと思う時，忘却のヴェールの下から彼の青春時代の屍を想起すると同時に，母の屍の周りでの不吉なお通夜を連想している．彼にとっては彼の母と彼の青春とは一つに過ぎないと言い得る．

更に，彼は彼の裡に一種の彼の母の理想像を抱いている．それは殆んど官能的なタッチで描写されている．すらりとした身体，繊細な顔立，黒い瞳，静脈の青さが見えるすき透った皮膚，頬にそっての髪のうねりと絹のような曲線，それに加えて，

"de beaux bras blancs sortant, à la hauteur du coude, des manches étroites d'une robe noire."⑦

母のこの理想像が彼の女性に対する尺度となっている．従ってこの理想像に近づく比例度において，その女性は彼に愛されるだろう．

"Ce premier amour avec Lucy, sous l'invocation d'Ossian, est une jolie esquisse, d'un trait pur et simple; c'est finement touché; il y a du sourire, un peu de malice, en un mot, de ces qualités qu'excède aisément le talent de M. de Lamartine."⑧

とサント・ブーヴの寵愛を受けた唯一の Lucy⑨ とのエピソードの中で，

"La blancheur de son bras sortant du réseau noir."

とオシアン風の韻文でラマルティーヌは彼女を書き表わしているし，またはっと眼を覚まし窓を開けて Graziella が始めて姿を見せる時，彼女は，

"un bras nu et blanc qui sortait d'une manche flottante." (Graziella)

と描写されている．同様に彼は彼が愛そうとする女性の裡に，彼の母の眼の永遠に愛撫するようにきらめく，あの光の流れを探している．

"Le Lac" 等の詩篇の生まれた Julie とのエピソードは余りにも有名である．彼が母に対して抱いていた愛情を無意識的に移したのは，彼が一番愛した Julie においてである．彼女は彼より年上であり，先ず彼女の精神の優越性，「追放された神性」が彼の心を打つ．従ってこの恋愛は他の恋愛には多少は見られる排他的，野性的な要素が除かれ，彼は彼の母による様に，彼女によって愛される．即ち彼が彼女に対する愛着を表わそうとする時，彼は彼女に彼の母の姿を思い出し，彼女に自分を彼女の息子のように呼ぶことを求める．この恋愛形式は，彼女が彼にとって恰もダンテにとってのベアトリスの様になり，彼が彼女の裡に彼の母を再び見出していることである．

多かれ少なかれ女性によって愛されるというこの恋愛形式は，他の女性とのエピソードの中にも見られる．

1811年の冬の或る日，Milly の孤独者は Mâcon での舞踏会に連れて行かれる．彼は Henriette Pommier が踊っているのを見て，直ぐに好きになる．初めはおずおずしていて彼の恋の誘惑的な相手に勇気を出して自分の気持を打ち明けていない．彼は Pommier 夫人のサロンに招待される．そこでその若い娘と出会い，彼等の眼は雄弁に語らい合う．夫人は，立派な貴族の出で教育のある，最近 Mâcon のアカデミーから選ばれたこの青年を快く歓待する．彼女は彼の裡に娘婿の姿を熱心に夢見る．彼

女はそのことを彼に卒直に話す．一方，ラマルティーヌの家庭ではこの浮わついた恋を風の便りに知る．それでこの結婚話はうまく運ばなくなる．即ちその父親が平民の出であり，上流社会からは受入れられておらず，その兄がだらしない下品な道楽者である娘，身分の低い娘との結婚についてはラマルティーヌ家は断じて承知しょうとしない．彼は失望する．だが彼女に愛着する余りに，25歳で彼女と結婚するために激烈な決心を彼は21歳の時しょうとする．帝政政府での何かの職，外交界での何かの地位を懇請しょうとし，軍隊に入隊しょうとさえしている．これらの職業が彼に幾ばくかの収入を得させ“ma femme”の持参金と合わせて生活の一助になると彼は考えている．彼はこの世の中では何ものも彼等を引離すことができないと考え，彼女を既に“ma femme”と呼んでいる．更に時には自然に彼は自分の生活に嫌悪を抱き死迄も決意している．この激しい情熱の相手であるHenriettetとのエピソードの結幕は，処で，どんなであったであろうか．

黒い憂鬱の中に沈んだこの哀れなラマルティーヌを気の毒に思っている彼の友人の処に，勝利の手紙が次の様な書出しで

“La première lettre que tu recevras de mon cher ami, sera datée de Florence ou de Rome…”⑩

届けられる．その手紙には若々しい狂喜が非常に溢れていて，彼があれほど迄に希望していたイタリヤ旅行のことが書かれている．然しHenriettetのことは可なり無造作に語られているに過ぎない．勿論七，八か月の間愛している人から離れることは彼にとって不幸なことであるが，生涯において二度とは微笑まない機まぐれな運命のチャンスに従うことを誇らかに述べているのである．このイタリヤ旅行は彼を彼女から引離すためにラマルティーヌ家が準備したものであるが，更に同行の新婚夫婦の甘い雰囲気さえも彼女との離別の悲哀に拍車をかけた様子もなく，彼の胸は引裂かれもせず，反対にこの旅行から引出す筈の彼の文学にとってのまた彼の詩にとっての利益だけを考えて胸を膨らませているのである．彼女は完全に彼の生活から消え去っていると言える．

Julieの死を知ったラマルティーヌが苦悶の動揺と長い悔恨の涙の幾週間を過したことは私達は知っている．そして彼女の影響は彼の詩人としての魂や才能に非常に大きく及ぼし，美しい詩篇が数多く生まれたことも私達は知っているが，それらの大部分が古き時代の詩人たちの無意識的記憶に満ち満ちていることは証拠だてられている．また一方では，彼の生活への影響は可なり早く消滅して行ったことも証言されている．彼の一番愛したJulieにおいてすら，彼というたくましい植物は，その様に嵐によって一時は曲げられはするものの，間もなく精気と生活力とを取戻しまた立ち上るのであるから，落穂拾い的な恋愛であったHenriettetとの彼の関係が忽ちにして消え去ったとしても不思議ではない．同じ様に，フランスに彼を呼び戻す彼の父の声に，別離に泣きくれるアルプスのGraziellaを，歎き訴えるナポリのGraziellaも彼は捨て去っている．情熱を捨て去ることが賢明である時は彼はそれを捨て去る．彼の理性は常に彼の情熱を支配している．このことは彼が育てられた厳しい環境，彼が受けた厳

格な教育に由来していて，彼は生涯そこから解放されることもできないし．恐らく決してそれを希望をもしなかった筈である．従って恋人たちの烈しい呪詛も脅迫も，彼のスキャンダルへの恐怖に対しては優位をもたないのである．この彼の態度の底には，ヴィニがラマルティーヌの魂の現実の二つの性格について非難した optimisme と égoïsme がうかがわれるように思える．optimisme は彼にこの世の中の悪を見させようとしないし．égoïsme は理性で制御されている情熱という形態を，彼は彼が女性を愛する以上に彼が女性から愛されるままであるという形態に変容させる．

要するに，この optimisme と égoïsme とが彼の裡にあっては，前述もした様に，彼が愛情を抱いた全ての女性に，彼をして彼の母との肉体的な若しくは精神的な類似を探し求めさせ，何等かの形で彼女たちの裡に彼の母を見出させていると解釈できる．この母への感情の定着が，また一方では，

"J'étais alors un des plus beaux enfants qui aient jamais foulé de leurs pieds nus les pierres de nos montagnes."

(Les Confidences)

の自己満足した自分の肖像の中でも，彼に念入りに母との肉体的な若しくは精神的な類似を引立たせようとさせているのである．

"des yeux d'un bleu noir, comme ceux de ma mère... Une expression un peu pensive comme était la sienne... Une extrême délicatesse de peau qui me venait aussi de ma mère…en tout le portrait de ma mère..." (Les Confidences)

これは内向性と呼ばれている性質があって初めて見られる精神作用ではなかろうか．この自我への後退は，謂わば，auto-érotisme であり，一種の amour pour soi である．これこそ narcissisme と呼ばれても差支えない精神形態だと思う．その証拠に自分の美しさについて

"Je ressemblais à une statue de l'adolescence enlevée un moment de l'abri des autels pour être offerte en modèle aux jeunes hommes." (Les Confidences)

と述べている．祭壇の蔭から抱き降された美しいこの青春像は，その完全な美しさのために，女性たちに囁かれ，崇拝され，愛される．即ち彼は彼自身余り愛さずに愛されるのである．Graziella, Julie, Régina は彼が愛させることを彼女たち自身から求めている．全ての女性たちは，そこで，多かれ少なかれ，Graziella の様に彼に言うのである．

"Je sais bien que je ne suis qu'une pauvre fille indigne de toucher seulement tes pieds par sa pensée. Aussi je ne t'ai jamais demandé de m'aimer. Mais moi, je t'aime, je t'aime!" (Graziella)

これは正しくナルシスに軽蔑されたニンフ Echo の声である．こうしてラマルティーヌは青春時代という河の流れで自分の美を賞讃しているのである．

次ぎに，ラマルティーヌの結婚当時を見てみよう。彼が自分の生涯を回想して種々のエピソードを書く時，彼は自分のことだけを夢みてはいない．自分の周囲に，彼は彼の心のあらゆる出来事に関心を抱き，彼に愛情を捧ぐ両親や友だちを常に意識している．彼等は彼の過ぎ去った生涯の真実の

詳細な姿を知れば必ず心を痛めるか若しくは苦しむであろう．この当時彼が一番意識していたのは誰よりも自分の妻である．彼の妻には "La Chute d'un Ange"⑪ の中のある描写があからさまなのを操正しくヴェールで覆うことを，余りにも厳格な彼女のカトリシズムから要求したエピソードが知られている．この様に何時も警戒している彼女の嫉妬心のために，彼の回想は母を基調とした時期以上の変容が要求されるのである．

Julie の死後立ち直ったラマルティーヌは一年間文学熱のとりこになる．彼は新しいジャンルの詩篇を書き，悲劇を創作する．彼は栄光のためのあらゆる有益な関係を求めて屢々パリへと上洛する．彼がまた病気に到れるのは1819年の春の数回のパリ滞在のその一つである．この時若いフランスの士官と結婚したイタリヤのプリンセスが彼の行き届いた献身的な看護人になる．恋は，後に Régina の名で回想される彼女の方から芽生え，激しく情熱的である．彼は何の危惧も意識の当惑もなかったわけではないが愛されるままになっている．彼女は日に日に誘惑的に魅力的になる．彼が病気恢復という口実のもとでパリを去る時，彼女はブルゴーニュで彼に会ってくれるように求める．そして彼女は Mâcon に彼女の夫が駐屯していたにも拘らず，更に彼の家族を知っていたにも拘らず，情慾的な愛撫で三週間彼に Julie の墓をさえ忘れさせるのである．然し，恋人たちは世俗的なスキャンダルやラマルティーヌ家のほんの少しの疑惑さえも避けねばならない．従って彼女の激しい哀願にも拘らず彼は彼女と絶交せざるを得ないのである．彼が献身的な愛情を捧げた彼女を裏切ったのである．彼は女性からはこの様に何時も決して裏切られもしないし，決して拒絶されもしないし，決して捨てられもしないのである．最初に捨てるのは彼なのである．彼の情熱は彼自身という枠の外へは，前述もした様に，決して出ていない．彼自身の裡には，嫉妬，憎しみ，涙という不幸な情熱は存在しない．このことは narcissisme の一面である高慢な虚栄心を正に表わしていると思える．

この出来事は1819年6月に起っている．そしてその翌年1820年3月11日 "Les Méditations poétiques" が出版され，どんな成功を収めたかは知られている⑫．次いで6月6日彼は前年 Aixで知合いになっていた若いイギリス娘 Marianne-Elisa Birch ⑬ と結婚した．そして若い夫婦は直ぐに，彼がナポリ特派大使の書記官という地位に着任しなければならなかったため，イタリヤに彼等の新婚旅行を兼ねて出発する．8月初旬には彼等はナポリに居を構え，楽しい日々を送っている．公的な書記官の仕事は取るに足らないもので，大使自身が一切の仕事を行っていた．彼は彼が今迄希望していた仕事が現在の仕事であり，更に希求していた生活が現在の生活であることを心の底から実感し，若い夫婦だけの幸福な生活を熱狂的に享楽している．そして彼は幸福の讃歌を歌っている．それが "Ischia", "Chant d'Amour", "Les Préludes" 等⑭ の施律的恍惚とした溜息なのである．最愛の人の腕に抱かれ，時が次ぎ次ぎと運ぶ陶酔を享受して満足している彼は，

Embrassons-nous, mon bien suprême,
Et sans rien reprocher aux dieux,

Un jour de la terre où l'on aime
Evanouissons-nous de même
En un soupir mélodieux.
(Les Préludes)

と，また

Souviens-toi de l'heure bénie
Où les dieux, d'une tendre main,
Te répandirent sur ma vie
Comme l'ombre sur le chemin.
Depuis cette heure fortunée,
Ma vie à ta vie enchaînée,
Qui s'écoule comme un seul jour,
Est une coupe toujours pleine,
Où mes lèvres à longue haleine
Puisent l'innocence et l'amour.
(Chant d'Amour)

と婚礼の歌を歌っている．

この情熱的な施律はラマルティーヌの恋愛生活に特殊な光を投げている様に思える他のどんな女性も，Julie でさえも，彼からこの様な施律を奪ってはいない．これは彼自身によって愛されたのは彼の正式の妻だけであって，他の全ての女性は彼自身によっては愛されていなかったことを証拠だてている様に思える．その証拠として，私たちは彼が結婚した後の生涯に，もはや表に現われた大きな情熱も，軽いアヴァンチュールも見出すことができない．浪漫派の詩人の中で唯一人，彼は忠実な夫であり，批難することのできない夫婦生活を送っている．彼のこの結婚生活には一人のJuliette Drouet⑮も一人の Marie Dorval⑯も見出すことはできないのである．然しながら "Méditations" "Jocelyn"⑰ で賞讃され，1848年の英雄である彼に女性の誘惑が確かになかった筈はない．彼は友の Virieu⑱に何時でも愛することができるだろうがその様なことはしないことを言明している．情熱の風は屢々彼の堅い性格をぐらつかせはしたが，誘惑に抵抗するという厳しい決意を守ったのである．

何故その様な態度に彼は立ち至ったのであろうか．彼の égoïsme は通俗的なそれではない．村での大貴族である彼は，自分の周囲に気前よく上品に，母や妻が行った様に，彼の慈善を繰り拡げる．そして彼は友人たちを愛し，彼の出会う女性たちに愛着を憶え，否定できない程の無私無欲さで自分の国家にも奉仕した．これらは全て彼の idéalisme の表れであるかも知れないが，彼は友人たちの裡にも，女性たちの裡にも，肉体的なそして知的な完成美の，政治においてすら，精神的な完成美の，彼の理想を，自分自身の裡以上には見出さすことができなかったのである．従って彼は自己の裡へと内向し，自分自身を大いに執着し愛するのである．故にラマルティーヌの恋愛に関する伝説の中に現われる諸要素を批評的に研究してみると，彼が偉大な恋人であったと私たちは言うことができないのである．

それでは "Les Confidences" "Raphaël" ⑲にしろ，"Graziella"⑳ にしろ，それらの作品によって展開されている恋物語は何なのであろうか．それは彼の詩的創造である．熱烈すぎる恋物語で何時も嫉妬心をあおられている彼の妻は，彼が死んだこれらの女性に対し，彼の心の鼓動を数え上げるのを諦めてみていることはできなかった．彼女は Julie と Graziella とは彼女の夫の栄光の一部に貢献したのだから受入れたであろうが，それでも秘そやかに彼の母の様に苦しんだに違いなかった．ラマルティー

ヌが Raphaël とか Elvire とかの名の下に Julie の性格にヴェールをかけたり，Graziellaに対しては病人のJulieに対してと同じ様に純粋な罪のない気持であったと屢々誓ったり，イタリヤのプリンセスにRégina という半透明の漠然とした名前を与えて，神秘のヴェールを倍加して，虚構の中に真実の物語を包み込んだのも，彼の妻の激怒しても仕方のない正統な性質を考慮しての彼の詩的創造であると解釈することもできる．そして彼は現実では屢々稀薄なので知覚もできない程の彼女たちという横糸を，彼の生涯における母—妻—姪という縦糸にからませて刺繍模様を作ったのである．

打明け話は告白ではない．ラマルティーヌの詩的創造が物語の年代的誤謬を犯させたり，彼の弱点を全て覆い隠させたりしているが，それは読者の関心を惹くための潤色若しくは変容である．従って彼におけるこの創造力という言葉で理解されるものは，バルザックの様な作家が非常に様々な人物を創造し，彼等に一つの市民状態を付与して，彼等の人生の複雑多岐な出来事に沿って彼等を追い求めるあの能力でないことは明らかである。ラマルティーヌは創案することはできない。彼は唯稀薄な過去の事実を濃厚にし，それを拡大し潤色変容するのである。50才を過ぎてもこの創造力の激昂は静まりはしなかったのである．

母を失い，子供を失くし，恋人たちも死んでしまっている50歳を過ぎた落魄したラマルティーヌを今度は誰が愛するだろうか．河に身を跼め灰色の髪をみつめている彼の後に，この瞬間，彼の母の美しさと威厳とを持った一人の若い娘が佇む．彼の姪である彼女は，彼と同じ血を静脈に受け継いでおり，Graziella のみずみずしさと若々しい優美さを備え，Julie の気高い感情さえ抱いている．彼女はあらゆる女性の様に．またラマルティーヌを崇拝している．ナルシスの最後の恋は Valentine de Cessiat ㉑ である．“Les Confidences” を彼が書いていた当時，彼が秘かにこの彼の姪に幾篇かの詩を捧げていることを私たちは知っている．“Un Nom” がこの不思議な恋をあばいている．

Il est un nom caché dans l'ombre de mon âme. / Que j'y lis nuit et qu'aucun œil n'y voit.㉒

更に1842年4月1日の両世界評論に発表された作品 “Le Coquillage au Bord de la Mer” は，詩人が無遠慮な行為若しくは嫉妬をくらますため，後年一人の外国女性に献じてはいるが，同じ不思議な恋を表わしている．

Comme un aveu d'amour qui n'ose s'échapper.

更に，行を進めて最後は，

Quel bruit plus éternel et plus doux sur la terre / Qu'un écho de mon cœur qui m'entretient de toi?㉓

である．

勇気を出して敢えて打明けられないこの恋の告白，それを詩人は無意識の裡に，Ischia の青空の下で，彼の青春時代の太陽で始めている．即ち彼の老年時代の恋する魂を無意識的に彼の青春時代の出来事の中に置いているのである．これは明らかに彼の壮年時代の出来事を彼の青春時代に帰したのと同じ方法である．では何故この様に

後年のあらゆる出来事を青春時代の出来事と混淆するのであろうか．ナルシスの自我像の最も美しい影像は青春像である．自我の最開花期である青春時代をナルシスである彼は哀惜し，この不思議な秘められた恋を発端として，青春時代に起った女性たちへの恋を哀惜するのである．従って "Les Confidences" の中で彼が彼を愛した全ての女性をよみがえらすのは彼女のためであり，それを回想している当時の証言であるよりは，ジイドも「ナルシスの眺めるところは現在である」㉔と述べている様に，それを回想している現在の老人の魂の証言である．故に謂わば，Julie, Graziella, Lucy, Régina そしてページの片隅に鉛筆で書かれた束の間のシルエットである他の女性たちも，殆んど Valentine de Cessiat de Lamartine の偽名に過ぎないと述べても極言ではなかろう．

〔註〕

① ジイド全集第1巻「ナルシス論」伊吹武彦訳．(新潮社，昭和26年)
② プレイヤード版の年譜による．1810年12月の出来事．
③ Mme Charles のこと，1816年10月から1817年12月18日彼女の死亡迄の出来事．広島大学文学部紀要第11号，拙著「ラマルティーヌに於けるシャルル夫人」参照．
④ 1811年12月から1812年4月迄の Antoniella との関係，彼女は1815年1月(？)死亡．
⑤ 1819年2月から6月迄の Léna de Larche との関係．
⑥ 1844年 Ischia で起草せられ，1847年書き終えられ，1849年出版される．1844年には彼は妻と姪たちとイタリヤ旅行をしている．
⑦ 15歳の母の肖像画に彼が記した言葉．
⑧ Sainte-Beuve: Causeries du Lundi. T. I. p. 30. (Classiques Garnier.)
⑨ 1809年12月 Pascal 嬢との出来事，手紙を韻文で書いて文通している．
⑩ Aimé Lafont : Narcisse ou les amours de Lamartine. P. 42.
⑪ 1838年刊行．
⑫ この書物の爆発的成功を準備したのは彼の高慢な虚栄心であることは Lanson などの研究で知られている．
⑬ Marianne-Elisa Birch は1790年3月13日生れであるから，彼よりは年上である．彼女の父親は sir William Henri Birch で，イギリス軍隊では才能ある司令官であった．Le mariage civil は marquise de la Pierre の田舎の家で行われ，翌日，宗教的儀式が Chambéry の知事 marquis d'Andezanné の礼拝堂で行われた．彼女は際立った美人ではなかったが，優雅で気転がすばらしくきき，そして最高の叡智を備えていた．絵画と彫刻との才能はすばらしかった．彼女は Saint-Point の教会に聖女エリザベスと聖女ジュヌヴィエーヴを寄進している．
⑭ Les Nouvelles Méditations Poétiques の作品群．
⑮ Juliette-Joséphine Gauvain 通称 Juliette Drouet. (1806～1883) フランスの女優．Victor Hugo は Lucréce Borgiaの Negroni 伯爵夫人の役で1833年彼女に注目し，彼女を愛した．その時以来，彼女は Bruxelles, Guernesey, Jersey と彼の亡命に従い，彼の秘書の役目をし，彼の原稿全部をコピーした．彼女のために詩人は la Tristesse d'Olympio を書いた．
⑯ Marie-Thomase-Amélie Delaunay. 通称 Mme Dorval. (1798～1849) フランスの女優．1829年彼女と Alfred de Vigny との間に6年間続いた恋愛関係が始まる．然し彼女

は A. Dumas のために彼を裏切る．詩人は捨て去られた時非常な苦しみを感じ，その痕跡を Journal d'un poète の中に，また la Colère de Samson の中に書き残している．

因みに，Musset と Sand との恋愛もここで想起してもらいたい．

⑰ 1836年刊行．

⑱ Gabriel-Henri-Aymon Virieu. Comte de Virieu-Pupetièrers. (1788～1841).

ラマルティーヌの生涯変らぬ最良の友だち，彼の父は Dauphiné でも最も古い家系の一つの出で，Assemblé Constituante (1789年の) の議員であった．1793年10月のリヨン攻略戦で王党派の軍列中で大佐として死んだ．Aymon は彼の母によって育てられ，Collège de Belley でラマルティーヌの学友となる．ついで詩人のナポリでの最初の滞在の同行者となり，未来の Graziella である Antoniella との彼の恋の聞き役となり，更にパリでは未来の，終局的には Elvire である Mme Julie Charles との彼の恋の聞き役をつとめる．正統王朝派であるが全く極端ではなかった彼は，外交界において可なり誠実な生涯を送った，彼の尽力によってラマルティーヌが外交界に入れたことを忘れてはいけない．彼が Lyonnais 新聞に掲載した記事を見ても，詩人に対する変らぬ愛情と尊敬とを生涯捧げたことが解る．彼の姉妹の一人 Stéphanie は画家として肖像画家としての優れた才能があり，詩人の肖像画を描いている．

⑲ 1849年刊行．

⑳ 1852年刊行．

㉑ 彼女は1821年5月17日，Saint-Amour (Jura) に生れる．詩人の長姉 Cécile の三女である．彼女は結婚することを常に拒み続け，そして彼女の生涯を詩人に捧げた．彼女の彼に対する態度は，"Adieu, je vous embrasse; je ne sais si c' est comme une fille,une amie, une nièce; mais ce que je sais, c'est que, quel que soit le sentiment, il durera autant que ma vie." "Une partie, le lieu que je voudrais habiter ne sera jamais ailleurs, ni plus loin que votre ombre par terre." (M.-T. Ollivier : Valentine de Lamartine) の言葉に現われている，実際，1854年以後は彼の側に居り，ラマルティーヌ夫人の最後も行き届いた世話で尽くしている．(1863年5月23日) 夫人の死後も彼女は彼の側に一人でとどまり，彼の数多くの試練，死別，孤独，破産，病気，失望を共にした．若し彼女が居なかったら彼はそれらに堪えられなかっただろう．

詩人の死後，彼女は自分の書翰集を出版した．

彼女の献身的行為によって，彼女は《詩人の養女と呼ばれるにふさわしかった．この呼び名は1868年8月31日付の勅令によって認可された．それで彼女の名は Valentine de Glans de Cessiat de Lamartine となった．

彼女はパリのサン・フィリップ・デュ・ルール通り8番地で1894年5月16日に死に，サン・ポワンのラマルティーヌ家の墓に同年5月21日に埋葬された．

プレイヤード版の年譜によると1867年9月，ラマルティーヌと彼女とが結婚したのではないかという疑問を提出している．

㉒ Lamartine : Oeuvres poétiques complètes. P. 1247.

㉓ Ibid. pp. 1201～2.

㉔ ①と同じ

〔参考資料〕

Lamartine : Oeuvres poétiques complètes. (Bibliothèque de la Pléiade.)
Lamartine : La Chute d'un Ange. (Droz.)

Lamartine : Jocelyn. (Garnier Frères.)
Lamartine : Romans d'Amour ; Graziella, Raphaël. (Garnier Frères.)
Brimont, René de.: Autour de "Graziella"; textes lamartiniens inédits, avec deux planches en héliogravure. (H. Champion.)
Barthou, L.: Autour de Lamartine. (Payot.)
Corf, L.: Le reliquaire de Lamartine. (Hachette.)
Bordeaux, H.: Au pays des amours de Lamartine. (Grenoble, J. Rey.)
Lafont, A.: Narcisse ou les amours de Lamartine. (Ed. Seheur.)